

## 俄藏敦煌文獻中に發見された禪籍について

程

正

### 一、俄藏敦煌文獻について

ロシア所藏のオルデンブルク・コレクションは、スタイン、ペリオ、北京の各コレクションとあわせて、敦煌文獻の四大コレクションとして知られている。周知のように、オルデンブルク・コレクションいわゆるロシア藏の敦煌文獻を構成する主な部分は、オルデンブルク氏をリーダーとするロシア第二次中亞探検隊が、當時のロシア政府の資金提供を受け、一九一四年から一九一五年にかけて、敦煌地區を中心に蒐集したものである。これらの古文書類は、サクトペテルブルクに運び込まれた後、アジア博物館（一九一八年に設立）に移管された。その後、アジア博物館は、一九三〇年五月にソ連科學アカデミー東方學研究所と改組された。さらに、一九五〇年にその本部をモスクワに移轉した際に、東方學研究所レニングラード（現サクトペテルブルク）分所が設立され、引き続き敦煌文獻の保管の任を擔い、今日に至っている。この間、一九五六年から一九六八年にかけて、一時的にアジア民族研究所に名を改められたこともあった。

ロシア所藏の敦煌文獻に對する研究は、ほかのコレクションと比べると、はるかに遅れていると言わざるを得ない。

一九三〇年代になって、ソ連科學アカデミー東方學研究所レニングラード分所のフルグ(フルグ)氏によってようやく本格的な研究が開始された。すなわち、『ソ連科學アカデミー東方學研究所所藏漢文寫本(非佛經部分)簡評』<sup>(1)</sup>、『ソ連科學アカデミー東方學研究所所藏漢文佛經古寫本簡明目録』<sup>(2)</sup>と題する論文の發表である。しかし、第二次世界大戦が勃發、ナチスドイツとソ連との間に繰り廣げられたレニングラード攻防戦の最中の一九四二年正月に、フルグ氏が命を落としてしまったことによつて、その研究が中断を餘儀なくされた。一九五七年、ソ連科學アカデミー東方學研究所に敦煌研究班<sup>(3)</sup>が結成され、ロシア藏の敦煌文獻に對する研究が再スタートするまでには、實に約一五年の歳月を要したのである。この敦煌研究班の主要メンバーに、後にオルデンブルク・コレクシヨンの専門家として學界に名を馳せたメンシコフ氏がいた。當時、研究班の主要任務は、コレクシヨンの文獻目録の作成であつた。その研究成果としてまとめられたのが、一九六三年、一九六七年にそれぞれ刊行された二冊の『ソ連アジア民族研究所藏敦煌漢文寫本注記目録』<sup>(4)</sup>である。第一分冊に一七〇七點、第二分冊に一七〇八號から二九五四號までの一二四七點がそれぞれ收められていて、二冊をあわせると、計二九五四點の古文書の目録が收録されている。その後、オルデンブルク・コレクシヨンを研究するには、定番の目録として重んじられてきたものの、收録されている古文書の數量が全體の六分の一弱にすぎなかつたことなどからして、コレクシヨンの全貌解明には、まだほど遠いと言わざるを得ない。一九九九年、これら二冊の目録の中國語譯が上海古籍出版社より『俄藏敦煌漢文寫卷敘録』(上、下二卷)(以下「敘録」と題して刊行されたのである。

その一方、世界各國の敦煌學の専門家たちの絶え間ない努力と國際協力によつて、スタイン、ペリオ、北京の三大家コレクシヨンの全貌が解明されるにつれ、唯一残された敦煌文獻の幻の祕藏ともいふべきオルデンブルク・コレクシヨンの全貌を知りたいという機運も高まってきたのである。すなわち、一九八九年八月に上海古籍出版社の社長魏同賢氏(當時)を團長とする訪ソ團が前ソ連科學アカデミー東方學研究所レニングラード分所を訪れ、ソ連側と協議し

た結果、オルデンブルク・コレクションのすべてを中國とソ連と共同で出版するという案がまとまった。その翌月の九月に、このプロジェクトのソ連側の總責任者であるメンシコフ氏が中國を訪れ、半年をかけて中國各地にある敦煌研究施設を次々と訪問し、中國の敦煌學者の協力を取り付けたことによつて、敦煌學研究領域における中ソの學術交流に拍車がかけられたのである。その後、ソ連の崩壊、ロシアの誕生という劇的な一幕があったにもかかわらず、わずか三年後の一九九二年一月に、オルデンブルク・コレクションを影印した『俄藏敦煌文獻』（以下、『俄藏敦煌』）第一冊が上海古籍出版社より刊行された。さらに二〇〇一年四月までの一〇年弱のあいだ、總勢一七冊にもほなる巨大なシリーズとなつた『俄藏敦煌』がすべて刊行されたのである。オルデンブルク・コレクションが公表されたことは、敦煌文獻の四大コレクションの中身がすべて出揃つたことを意味するものであるといえよう。こうした見地からすれば、『俄藏敦煌』の刊行が敦煌學の研究においては極めて重要な意味をもつものといふことができる。

オルデンブルク・コレクションは、中の三六八點（のちに追加された二點を含む）とⅡⅩの一九〇九二點の二部分によつて構成され、都合一九四六〇點にもほなる一大コレクションである。中とは、前述したフルグ氏のロシア語表記の頭文字で、基本的には彼によつて編目されたものをいう。<sup>(5)</sup> その特徴として注目すべき點は、オルデンブルク・コレクションでは最も紙幅の長い寫本ばかりということである。一方ⅡⅩとは、ロシア語の敦煌のイニシャル文字で、フルグ氏の編目した以外の敦煌文獻は、すべてがⅡⅩで編目されている。また普段、オルデンブルク・コレクションはロシア所藏の敦煌文獻の代名詞として使われているが、實際、これらの古文書類のすべてがオルデンブルク氏によつて蒐集されたものではなかつた。すなわち、メンシコフ氏が記された『敘錄』の序によれば、一九一四―一九一五年の莫高窟で蒐集したもの以外に、一九〇九―一九一〇年に、同氏による第一次吐魯番探検によつてもたらされたもの、同じ頃、ロシア帝國駐烏魯木齊總領事であつたコロトコフ氏(Kolotov)によつて蒐集されたもの、また、年代不詳ではあるが、マロフ氏(Malov)によつて蒐集された于闐語(コータン語)寫本、なども含まれているといふ。<sup>(6)</sup>

今回、シリーズ『俄藏敦煌』が編輯される際、マロフ氏によつて蒐集された于闐語文獻は收録されなかつた。すなわち『俄藏敦煌』（二七冊）は、次のように構成されている。

- 第一冊：Φ〇〇一〇四二號
- 第二冊：Φ〇四三〇八五號
- 第三冊：Φ〇八六〇一四九號
- 第四冊：Φ一五〇〇二五〇號
- 第五冊：Φ二五一〇三六六號
- 第六冊：Π x 〇〇〇〇一〇〇六〇〇號
- 第七冊：Π x 〇〇〇六〇一〇一八四號
- 第八冊：Π x 〇一八五〇二〇〇〇號
- 第九冊：Π x 〇二〇〇一〇二七〇〇號
- 第一〇冊：Π x 〇二七〇一〇三六〇〇號
- 第一一冊：Π x 〇三六〇一〇五〇〇〇號
- 第一二冊：Π x 〇五〇〇一〇六一〇〇號
- 第一三冊：Π x 〇六一〇一〇七九〇〇號
- 第一四冊：Π x 〇七九〇一〇七〇〇〇號
- 第一五冊：Π x 一〇七〇一〇一九〇〇號
- 第一六冊：Π x 一一九〇一〇六七〇〇號
- 第一七冊：Π x 一六七〇一〇一九〇九二號、Φ三六七、三六八號

このうち、第一六冊に收録されるはずのⅡx一二九一〇―一四一五六號は、前述のマロフ氏によつて蒐集された于闐語文獻に當たり、收録されなかった。また第一七冊に收録されているⅡx一七〇一五―一七四三五號は、前述のコロトコフ氏によつて蒐集された文獻である。

ロシア所藏の敦煌文獻を概観すれば、殘卷や斷篇が極めて多く、そのために、文獻に表題をつけるという特定作業が困難を極める。その結果、全一七冊のうち、表題がつけられたのは、第一冊から第一〇冊までで、第一一冊以降は、Ⅱxの目録番號のみがつけられている。所藏文獻の内容がすべて公開されたとはいへ、その整理・特定の作業が豫想以上に進んでおらず、完全な目録を完成させるだけでも、かなりの時間とさらなる努力が必要であろう。當初の暴露の事前協議の結果、第一一冊以降の目録作成の任務は、中國側が擔うことになっている。その主要メンバーには、上海古籍出版社、蘭州大學、敦煌研究院、戒幢佛學研究所などの名が連ねられている。特に戒幢佛學研究所は、第一一冊から第一七冊までの佛教文獻の編目・整理を擔當しており、その研究成果として發表されたのが、勝義編『俄藏敦煌文獻』第十二冊校讀記（上）<sup>〔7〕</sup>である。その中では、Ⅱx〇五〇〇一からⅡx〇五五〇〇までの五〇〇點の文獻について、基本的な書誌學データを示し、文獻内容の比定も行われている。今後、中國側の目録作業が一層注目されるよう。

以上、俄藏敦煌文獻の全般について簡単な紹介を試みたが、次にその中に含まれる禪宗文獻について考察を加えることにしたい。

## 二、俄藏敦煌文獻中に發見された禪籍について

オルデンブルク・コレクション以外の三大コレクションをはじめとする、世界各地に保管されている敦煌文獻中の

禪籍については、既に多くの先學によつて紹介、研究がなされてきた。その一方で、田中良昭氏は、敦煌禪宗文獻に關する研究の最高水準と稱讃される『敦煌禪宗文獻の研究』の中で、當時入手しうる僅かな情報を頼りにして、オルデンプルク本の敦煌文獻についても言及されたが、その索引によれば、それらは都合一三點で、そのうち禪宗文獻と思われるものは七點にすぎない。<sup>(9)</sup>

その後、敦煌文獻の研究の最初期から一九九〇年代頃までの數多くの研究成果を網羅し、それを要領よくまとめたのが田中良昭氏の「敦煌の禪籍」<sup>(10)</sup>であるが、その頃はオルデンプルク・コレクシヨンの全貌がまだ知られていなかったために、ある程度その消息を窺わせながらも、ごく簡潔な紹介にとどまっていたのである。<sup>(11)</sup>

その後、俄藏敦煌文獻の禪籍については、中國人の學者によつて單發的に觸れられたことはあつても、まとまつて紹介されたものについては、筆者は寡聞にしてその存在を知らない。こうした状況を改善するために、筆者は、メンシコフ氏等による『敍錄』<sup>(12)</sup>と田中氏の『敦煌禪宗文獻の研究』に附せられた索引を手掛かりにして、俄藏敦煌文獻の中から禪籍と思われるものを選別し、紹介するのが、本小論の意圖することである。その分類方法や順序などについては、田中氏の「敦煌禪宗文獻の研究」と同氏の「敦煌禪宗資料分類目錄初稿」の凡例を參考にした。すなわち、(一)傳燈・嗣承に關する文獻、(二)禪法・修道に關する文獻、(三)銘・箴・讚・偈類、(四)教理問答・綱要書類、(五)經注・經序類、の五項目の分類である。

なお、各禪籍に關する從來の研究成果については、田中氏の「敦煌の禪籍」を參照されたい。本小論では、一九九〇年代以降に新たにその存在が知られたものに絞つて、紹介していきたい。

## (一) 『楞伽師資記』

淨覺撰『楞伽師資記』は、敦煌文獻にしか存しない初期北宗禪の燈史の書として重要視され、發見されてから、テ

キストの検討や思想的研究などのあらゆる分野において多方面に論じられてきた。そのテキストとしては、斷簡を含め、以下の七種の存在が指摘されている。すなわち、S二〇五四、S四二七二、P三二九四、P三四三六、P三三七〇三、P四五六四の七種である。この七種を用いて、柳田聖山氏が作成されたテキスト<sup>(14)</sup>（以下、柳田本）は、今日最もよいテキストとされる。しかしながら、それでも淨覺自序の首部の數行の缺は、未だに補われていない。今回、筆者が調査したところ、俄藏敦煌文獻の中から新たに二種の存在を発見することができた。すなわち、Дх〇一七二八とДх〇五四六四、〇五四六六の二種である。この二種のいずれもが『楞伽師資記』の序文に當たる殘簡である。

# 1、Дх〇一七二八（斷簡）

『敍錄』では、『景德傳燈錄』（？）という擬題のつけられているテキストである。その解題では、次のように記されている。

殘卷、二〇・五×一四・五。手卷下半部、首尾缺。10行、不全。右下部經文殘。紙色微褐、紙面粗糙。畫行稍粗。楷書。無題字。（下略）（下、三九一頁）

さらに、そのテキストの本文内容は、以下の通りである。なおわかりやすくするために、缺損した内容を柳田本によつて補い、【】でかこむ。數字は行數を表す。以下の凡例は、これに準ずる。

## 1

（前缺）去有因、令逢正法、

2 【每至披覽、非管見之所知。靜坐思】惟、非小人之所【解。】生生盡命、

3 【傳達摩之遺文、世世之中、誓願】事之足下。去大足元年、【在於東】

4 【都、遇大通和上諱秀、蒙授】禪法、開示悟入、似得【少分。】每呈心

5 【地、皆云努力。豈其福薄、忠孝無】誠。和尚隨順世間、奄從化往。所以

6 【有疑惑、無所呈印。有安州壽山太和】上、諱蹟。俗姓王、太原祁人也。

7 【因高祖作牧（夢か）、生瞻雲夢之澤。是蘄州】東山忍大師傳燈弟子也。大

8 【和尚在壽山之日、於方丈室中入淨（靜か）、突】然兩目中。各出一五色舍利。

9 【將知大師成道已久也。大唐中宗孝和皇】帝景龍二年。有勅召

10 【入西京。便於東都廣開禪法。淨覺當衆】歸依。一心承事。兩京來（以下缺）

傍線を付した最初の一行の七字のみが、いままで知られている七種のテキストにはすべて缺損していた序文の一部である。わずかではあるが、『楞伽師資記』の完全復元にとって、一歩前進であることに相違なからう。

また、柳田本との比較によって、 $\text{Jx} \times \text{O} \text{一七二八}$  のもとの一行の字數もわかるようになった。すなわち、もともと一行に二三乃至二四字で書かれたテキストであることが推定される。

2、 $\text{Jx} \times \text{O} \text{五四六四}$ 、 $\text{Jx} \times \text{O} \text{五四六六}$ （斷簡）

これは、『敍錄』にも未收のものであるからして、何故に番號が二つもつけられていたのか、その理由はわからない。しかし、寫眞を見る限り、現在一枚となっているテキストの眞ん中に横になる一本の切れ目がはっきりと見える。おそらく、もともと一點であったテキストが、上下にやぶられた故に、編目の際に、二つの番號がつけられたものであるう。

寫眞で確認できるのは、罫線入りの紙に一行二五〇二六字で書かれた二七行の斷簡である。テキストの内容は、淨覺の自序に當たる（前缺）西京、便即於中廣開禪法。淨覺當即歸依、一心承事……から「無念常眞、無染無著無（以下缺）」までである。<sup>(15)</sup> しかも先述の  $\text{Jx} \times \text{O} \text{一七二八}$  の本文との一行の重複を除けば、兩者の内容はうまく結合できる。



これらの二種のテキストが新たに出現したことによって、從來知られる諸本ではわかり得ない箇所もあることが判明した。たとえば、左表に示したような誤字・脱字と思われるものがある。

Д x 〇五四六四、〇五四六六	柳 田 本
16: 獨守淨心、抱一冲谷。	獨守淨心、抱一冲谷。(六七頁)
21: 身雖爲佛	身雖爲之本、識見還有淺深。(六七頁)
22之本、識見還有淺深。	

また勝義編『俄藏敦煌文獻』第十二冊校讀記(上)<sup>(16)</sup>にも、當文獻が『楞伽師資記』の斷簡であると指摘されている。

今後、『楞伽師資記』のより完全な校訂本の作成には、Д x 〇一七二八とД x 〇五四六四、〇五四六六の二種のいずれもが重要な校本となりうるであろう。

## (二) 『歷代法寶記』(斷簡)(Φ二六一)

『歷代法寶記』は、北宗、荷澤宗に續いて、四川省を根據地にして興隆した淨衆・保唐宗の燈史の書であり、『楞伽師資記』と同様に敦煌文獻にしか存しない貴重なものである。從來知られているテキストは、S五一六、S一六一一、S一七七六V、S五九一六、P二二二五、P三七一七、P三七二七V、石井光雄舊藏本(以下、石井本)の八種であるが、石井本の所在が不明とされ、長い間その内容が知られていなかった。柳田聖山氏がS三七一七と石井本を除く六種のテキストを用いて校訂されたものは(以下、柳田本<sup>(17)</sup>、長年『歷代法寶記』の最良のテキストとして廣く利用されてきた。

二〇〇二年三月に中國の北京で開催された「中日敦煌佛教學術會議」において、北京大學教授であり著名な敦煌學者である榮新江氏が「有關敦煌本『歷代法寶記』的新資料——積翠軒文庫舊藏“略出本”校錄——」と題する研究發表<sup>(18)</sup>をされた。その中心テーマとされるのが、まさに長年行方不明とされた幻の石井本『歷代法寶記』<sup>(19)</sup>なのであるが、それに先立つテキスト各種の紹介によれば、前述の八種以外には、S一一〇一四とΦ二六一の二種があるという。ただS一一〇二四は『歷代法寶記』のタイトルしか書かれていないものであるが、Φ二六一はまさに俄藏敦煌文獻に屬するものである。

『敘錄』では、擬題を附してはいないものの、「禪宗第二祖求那跋陀羅的碑文」と説明されている。さらに、その解題には、

手卷、一一三×二八。首缺。3紙。59行、毎行28〜30字。紙色微褐。畫行稍粗。楷書小字。前3行下一半缺。無題字。(下略)(上、六〇七頁)

とある。

この文獻は、首、尾共に缺けており、その内容が、佛教と道教の争いの終わるところの「(前缺)名、晩年開釋卷、猶日暎衆……」から、東土第二祖慧可傳のタイトルである「北齊朝第二祖(以下擱筆)」までのものである。<sup>(20)</sup>すなわち、西天二十九祖と東土第一祖の菩提達摩多羅章がすべて含まれている。西天二十九祖の傳燈説にせよ、まったく別人である菩提達摩と達摩多羅の二人を巧みに結合させ、菩提達摩多羅という人物を創作したことにせよ、いずれもが『歷代法寶記』のもっとも特徴的な主張であるが、このことを記述する箇所であるからして、斷簡ではあるものの、その重要性の高いことは明らかである。

以下、左表でΦ二六一と従來のテキストとの相異の、幾つか指摘する。

Φ二六一

柳田本

20…時師子比丘示形、身流白乳。末曼尼彌師訶等被刑  
21死、如凡人流血灑地。

…時師子比丘示形、身流白乳。末曼尼彌師訶等被刑死、  
流血灑地。(五九頁)

30…問達摩祖師承上相傳付囑。自有文記分明。

問達摩祖師承上相傳。自有文記分明。(六〇頁)

42…西國所傳法師者、亦具引在禪經序上

西國所傳法、具引經序上。(六八頁)

48…時魏有菩提流支三藏、光統律師、於食中著毒餉。

時魏有菩提流支三藏、光統律師、著毒餉。(六八頁)

またΦ二六一の本文については、すでに榮氏が「敦煌本禪宗燈史殘卷拾遺」<sup>(21)</sup>でテキストの作成と研究をされているので、それに譲りたい。このほかに、北京の首都師範大學教授の郝春文氏が、S五一六を底本とし、P二二二五(甲本)、P三七二七(乙本)、S五九一六(丙本)、P三七二七V(丁本)、S一六一一(戊本)、S一七七六V(己本)をそれぞれ校本として、校記を付した新たなテキストを作成されている<sup>(22)</sup>。

(二) 『蕪州忍和上導凡趣聖悟解脫宗修心要論』(以下『修心要論』)

五祖弘忍(六〇一―六七四)の禪法を伝える『修心要論』のテキストについては、敦煌文獻に限って言えば、從來知られているものにS二六六九V、S三五五八、S四〇六四、P三四三四、P三五五九、P三七七七、字〇四、蒙七五、龍谷大學圖書館所藏の『觀門法大乘法論』所收本(以下龍谷本)、L一二七七、L二六四二の二一種がある<sup>(23)</sup>。『修心要論』についての研究には、鈴木大拙、柳田聖山、John R. McRaeの諸氏が大きな足跡を残されており、これらについての紹介は、田中良昭氏の「敦煌の禪籍」に詳しい<sup>(24)</sup>。その後、從來校訂されたテキストの不備に気づいた田中氏は自ら新たなテキストの校訂と和譯をされた。すなわち、田中氏の「校注和譯『蕪州忍和上導凡趣聖悟解脫宗修心要

論<sup>(25)</sup>」(以下、田中本)である。

前述のL一二七七(Дх○○六四九)とL二六四二(Дх○一九九六B、Дх○二〇〇六B<sup>(26)</sup>)の二種は、俄藏敦煌文獻であり、メンシコフ氏の『敍録』によって、その存在はつとに知られていたものの、<sup>(27)</sup>その内容については、公表されていなかったために、窺い知ることができなかったのである。

# 1、Дх○○六四九V(斷簡)

從來知られていたL一二七七である。『敍録』の表題では、「尊凡起聖悞脫宗修心成佛要論」となっているが、實物の寫真から筆者は次のように判讀した。つまり「導凡趣聖悞脫宗修心成佛要論」である。「尊凡起聖悞脫宗修心成佛要論」は誤讀であろう。しかも、そのタイトルの下に、「蕪州忍禪師 譯」と記されていることから考えると、これはまぎれもなく『修心要論』の斷簡であることが判る。『敍録』の解題には、

殘卷、六四・五×二六。部分手卷、首尾缺。3紙(第1紙不全)。26行。下面邊沿殘。有外題字(在背面)。外題字下面是譯者名字、「蕪州忍禪師譯」。紙色淡黃、紙質薄。楷書、字體潦草。經文中有墨筆點、新的一品前面有墨筆符號「」。 (七—九世紀)(下略)(上、四九五頁)

とある。

解題に示されるように、『修心要論』のタイトルがあるのは紙背である。しかも筆者が調査したところ、表に書寫されている内容は、『修心要論』の本文とは全く異なるものであることが判明した。その詳細については後述することにした。

結論としては、Дх○○六四九Vは『修心要論』(タイトルのみ)の斷簡である。

2、 $\text{Dx} \times \text{O} \text{一九九六B}$ 、 $\text{Dx} \times \text{O} \text{二〇〇六B}$ （斷簡）

まず、『敍錄』の解題をみてみよう。

佛教問答式經卷。解釋佛教名詞「守」、「守心」。

同一寫卷的二件殘卷、不直接相銜接。兩面均有經文。紙色微黃灰、紙質薄。楷書。無題字。（八一〇世紀）

(1) 殘卷、七×七。手卷下面邊沿、首尾缺。4行、不全。從「：問曰何知守心」、到「：何「知守心是」□」。

(2) 殘卷、七・五×八・五。手卷上面邊沿、首尾缺。4行、不全。從「□□□性故：」到「成者會是守自「眞」……」。

這2件殘卷是用來裱黏本書1935寫卷的。

背面、參看本書2673。（下、三七二頁）

これによれば、 $\text{Dx} \times \text{O} \text{一九九六B}$ と $\text{Dx} \times \text{O} \text{二〇〇六B}$ の二種は、もともと表裏ともに利用された同じ寫本の別の箇所、しかも、 $\text{M} \text{一九三五}$ （ $\text{Dx} \times \text{O} \text{一九九六A}$ 、 $\text{Dx} \times \text{O} \text{二〇〇六A}$ ）<sup>(29)</sup>の補修材料として再利用されていたことがわかる。

この殘卷にわずかに殘された内容は、確かに『修心要論』である。田中本の本文をベースに、 $\text{Dx} \times \text{O} \text{一九九六B}$ からの語句を傍線で、 $\text{Dx} \times \text{O} \text{二〇〇六B}$ からのをなみ線でそれぞれ示してみよう。

□問曰、何知守心【是涅槃之根本。答曰、言涅槃者、體是寂滅、無爲安樂。】

我心既眞、妄相<sup>(30)</sup>【即斷。妄想斷故、即具正念。正念具故、即寂照智生。寂】

照智生故、即【窮達法性。】

【窮達法】性故、【即得涅槃。故知守心是涅槃之根本。問曰、】

何知守心是入【道之要門。答曰、乃至舉一手爪甲畫佛像、或造恒沙功德者、只是】

佛爲教道無智慧<sup>(31)</sup>【衆生、作當來之因、勝緣報業、及見佛之因。若願自身早】

成【佛】者、會是【無爲】守【自】眞【心】。（田中本、四〇～四一頁）

この本文内容から確認できるように、 $\text{D} \times \text{O} \text{一} \text{九} \text{九} \text{六} \text{B}$ と $\text{D} \times \text{O} \text{二} \text{〇} \text{〇} \text{六} \text{B}$ とは直接に結合はできないものの、内容からすれば、兩者は本来同一本でそれが分斷されたものと考えられよう。

(四)『稠禪師意』(斷簡) ( $\text{D} \times \text{O} \text{〇} \text{六} \text{四} \text{九}$ )

前述したように、 $\text{D} \times \text{O} \text{〇} \text{六} \text{四} \text{九} \text{V}$ には、『修心要論』のタイトルが書かれているが、そのおもての内容は、まったく別のものであり、これは大きく四つの部分に分けることができる。しかも筆者の考察によれば、その第三部分に當たるものは、まさに『稠禪師意』の一部であることが判明した。

『稠禪師』とは、僧稠(四八〇―五六〇)のことである。彼は、達摩と同じ頃に中國の北地で大いに禪風を擧揚し、達摩と並び稱せられていたことが、道宣(五九六―六六七)の『續高僧傳』の習禪篇によって知られている。また、僧稠についての新しい研究成果に、沖本克己氏の「僧稠について」<sup>(32)</sup>がある。この論文は、從來の研究を紹介した上で、蒐集しうる僧稠の資料を網羅し、これらを踏まえつつ、宗派の範疇を離れて具體的な實踐家という斬新な視点から僧稠をとらえて論じたものである。<sup>(33)</sup> 論文の最後にP三五五九に依據した『稠禪師意』など僧稠關係のテキストの校訂(以下、沖本本)も附されている。

ところで、從來知られている『稠禪師意』のテキストは、『稠禪師意』、『稠禪師藥方療有漏』、『大乘心行論』など僧稠關係資料を含む一四種の北宗禪關係の文獻を<sup>(34)</sup>連寫した長卷子本P三五五九の一種のみであった。それ故に、『稠禪師意』の校訂テキストのいずれもが、P三五五九にしか頼らざるを得なかったのである。 $\text{D} \times \text{O} \text{〇} \text{六} \text{四} \text{九}$ の出現によってこうした状況が改善されるといえよう。 $\text{D} \times \text{O} \text{〇} \text{六} \text{四} \text{九}$ の表に連寫されている四種の禪宗文獻の第三番目がこの『稠禪師意』であることからして、P三五五九の校本になりうるからである。

しかしながら残念なことに、 $\text{D} \times \text{O} \text{〇} \text{六} \text{四} \text{九}$ に書寫された『稠禪師意』は完本ではない。前述の通りこの寫本の表

には、四種の文獻が連寫されていて、『稠禪師意』はその三番目に當たるものである。その内容は、一九行からなる沖本本と比較して示せば、そのタイトルを含む第一行から一二行までに相當する。それ以降は刪筆によつて刪除され、「」の記號の次に、全く別内容のものが二行ほど書寫されている。しかもⅡ×〇〇六四九は、保存状態が決してよいものとはいえず、特に寫本の天地にあたる部分は、損傷の激しい斷簡である。そうではあるが、P三五五九の唯一の校本として十分價值のあるものといえよう。

(五) 『導凡趣聖心決』(斷簡) (Ⅱ×〇〇六四九)

『導凡趣聖心決』(以下『心決』)のテキストは、從來P三五五九に連寫されている一四種の文獻に含まれる一種しか知られていなかった。管見による限り、田中良昭氏の「敦煌禪宗資料分類目錄初稿」<sup>(35)</sup>で觸れられた以外に、これについて言及されたのは、柳田聖山、篠原壽雄の兩氏のみであつた。柳田氏と篠原氏は、『心決』の内容が『修心要論』の本文に直接續くものかどうかは判らないとしながらも、そのタイトルが『修心要論』の別名であると指摘された。<sup>(36)</sup>

一方、前述のようにⅡ×〇〇六四九の表には四つの文獻が連寫されている。その最初のもは、首缺のため題名こそわからないが、そのわずか五行弱の内容をP三五五九と比較した結果、『心決』の後半部分に當たるものであることが判明した。そこで、筆者はこの文獻に『心決』(斷簡)のタイトルをつけたのである。柳田氏の指摘もあり、『心決』と『修心要論』の題名の類似性からすれば、五祖弘忍の禪法思想の究明には、『心決』の果たす役割が大いに期待されよう。





S 四六五四、S 五五二九、P 二六九〇、P 二九六三、P 四六〇八、周七〇の七種である。その體例は、三・七・七・七・三・三・三・三・七・七であるという。<sup>(38)</sup>

俄藏敦煌文獻にも、『南宗讀』と題される寫本が存在している。すなわち、Φ一七一とДx〇二二七五Vの二種である。

# 1、Φ一七一

まず、Φ一七一については、『敍錄』の解題に、

（前略）殘卷、三三×三〇。1紙。17行、毎行16—18字。有首題字。『五更歌』式詩。紙色微黃。畫行稍粗。楷書、字體不熟練。背面有小事附記「大乘法」。（十一世紀）（下略）（上、五三七頁）

とあるが、實際に寫真を見る限り、テキストにはほとんど損傷がなく、完本と考えてもよからう。その内容をS四一七三のと比較してみると、文字の相異も少ない。ただ、ほかのテキストとは對照的に、Φ一七一の體例は、最初に三文字が多く、全體的には三・三・七・七・三・三・三・三・七・七となっている。

# 2、Дx〇二二七五V『南宗定邪讀一本』（斷簡）

目錄番號が示しているように、『俄藏敦煌』にはこのテキストが裏に書寫されているとしているが、『敍錄』には、表に書寫されているとある。（下、四二〇頁）この文獻は破損が著しく、しかも褐色の紙が用いられているために、寫真でその文字を確認することは、困難を極める。テキストの首題が缺けているものの、その尾題には『南宗定邪讀一本』とある。

しかし、筆者がその内容を確認したところ、『南宗讀』のものと一致した。従ってДx〇二二七五Vも『南宗讀』

の一異本であるということになる。しかも從來『南宗讀』と呼ばれたものには、『南宗定邪正五更轉』の異名があり、この『南宗定邪讀』の名は、この二つの名稱が混同されたのであらう。

(八) 『徵心行路難』(斷簡) (D x 〇〇六六五、D x 〇二四六二)

川崎ミチコ氏によれば、『行路難』には大別して二つの系統がある。その一つは、S 六〇四二と龍谷大學所藏本に該當するものであり、他の一つは、S 五九九六とそれに接續のできるS 三〇一七、P 三四〇九の三種が該當するものであるという。<sup>(39)</sup>さらに『禪學大辭典』によつて指摘された前者と同じ系統にあるL 二八五六が、まさにD x 〇〇六六五とD x 〇二四六二の二種に相當するのである。

D x 〇〇六六五とD x 〇二四六二は、同じ寫本の二つの斷片である。兩者を結合させることによつて、『行路難』の第八、九、一〇、一一部分に當たる詩の一部を復元しうるのであり、そこには、從來のテキストでは、<sup>(40)</sup>缺損によつて判讀されないものも含まれているのである。

なお、『行路難』に關する研究成果については、田中良昭氏の『「行路難」と「安心難」<sup>(41)</sup>』に詳しく述べられており、それにゆずりたい。

(九) 佛法問答↓神會語錄(擬題) (斷簡) (D x 〇〇九四二)

わずか一一行、六〇字しか残っていない斷簡ではあるが、俄藏敦煌禪宗文獻の中では、最も注目すべき文獻の一つと思われる。

まず、『敘錄』の解題をみてみよう。

問答式經典、解釋佛教用語：無念。

殘卷、二二・五×一四。手卷上部、首尾缺。11行、不全。紙色淡褐、紙質粗。書行細。楷書。無題字。(九—十世紀)

從「名之爲空無念體上」：到「是無念是」。(上、四四五頁)

解題にもあるように、Dx○○九四二の損傷は特に著しいものである。紙の長さや文獻の長さなどはもちろんのこと、原型ではもとと一行に何字ぐらい書寫されていたのかさえも推測不能な状態である。

それにもかかわらず、筆者が重要と判断した理由は、そのわずかに残された部分の内容にある。すなわち、そこに書かれた「無念」、「頓教」、「頓見本性」、「知見」などの佛教用語は、いずれも荷澤神會に歸せられたもの、言い換えれば、神會の禪思想を語る際に、缺かすことの出来ない特徴的なキーワードばかりだからである。

次に、Dx○○九四二の内容と、それに『神會和尚禪話錄』中に對應する可能性のあると思われる内容を對照してみることしたい。

Dx○○九四二	『神會和尚禪話錄』
1 名之爲空。無念牀上、自【缺損】	①眞如體不可得、名之空。以能見不可得體、
2 然常寂、有恆沙用。【缺損】	湛然常寂、而有恆沙之用故言不空。(八二頁)
3 禪問(門?) 頓教諸家【缺損】	②不作業即是無念。無念體上自有智命。(二一九頁)
4 母、頓生其子。其母與【缺損】	禪門頓教、諸家不同。論之興也：(四六頁)
5 亦復如是。頓見本性、【缺損】	譬如其母、頓生其子、與乳漸養育：(中略)：
6 言知者、知何物。見者、【缺損】	頓悟見佛性者、亦復如是、：(三〇頁)
	或有見者、或有不見者。云何有如是差別：(八二頁)

7 見。問、見與無何有【缺損】	
8 是無物。無物是見【缺損】	但莫作意、心自無物、卽無物心、自性空寂、空寂體上…（一一九頁）
9 無物是躰。見是□【缺損】	起心卽滅、覺照自亡、卽是無念。是無念者…（三九頁）
10 是性。答、無物□【缺損】	
11 是無念是【以下缺】	

この表にみられるように、問題點を二つに絞ることができよう。まず、Дх○○九四二の内容が、同じく敦煌文獻から發見された神會關係の文獻と類似している點である。特に四行目の「母頓生子」の譬喩は、「菩提達摩南宗定是非論」に神會が自身の「頓悟漸修」の思想を説明する時に用いたものと明らかに同一の類のものである。次に、Дх○○九四二にある一部の内容が、神會關係の文獻から類似するものを見出すことはできるが、その順序は、現在知られている文獻とは異なるものであること。すなわち、假にДх○○九四二が神會關係のものであるとすれば、それは現在知られているものとは全く異なつた別のものであることは、ほぼ間違ひなからう。

（一〇）『小乘三科』（斷簡）

『小乘三科』及びそれと極めて密接な關係にある『大乘三窠』、『三窠法義』などの敦煌文獻が、禪宗文獻として注目されたのは、『六祖壇經』に慧能（六三八―七二三）の遺誡として殘された三科法門、三十六對の教えがあつたからである。<sup>(43)</sup>

田中氏の研究によれば、敦煌本『小乘三科』には、S五五三一、P二八四一、致七四、官九三、龍八二、羽五八、裳六六の五種、L一一四〇、L一三三七の都合九種の存在が知られている。それぞれのテキストの紹介については、

田中氏の論文に詳しく述べられているので、それにゆずりたい<sup>(44)</sup>。

そこで以下、オルデンブルク本の二本について、紹介することにしよう。

1、 $11 \times 10 \times 480$  (斷簡)

『敍錄』の解題では、

經文内容は講「三寶」、問答式。

殘卷、 $19 \times 10$ 。部分手卷、呈正方形、中間有3個不大的破洞。經文首尾缺。12行。紙色淡褐、紙質厚。行書大字。墨色已褪色、經文也難于辨認。無題字。(九—十世紀)

從「小乘三?問三寶答有」、到「□上以□〔僧寶〕」。

背面僅有二行經文的殘迹、看不清。(上、五—五頁)

と記されているが、實際、最初の「小乘三□」というのは、むしろ首題とすべきものであり、 $11 \times 10 \times 480$ は『小乘三科』の斷簡である。その内容は、最初の三寶問答のうち、別相三寶までに相當するものである。

2、 $11 \times 10 \times 708$  (斷簡)

『敍錄』の解題に、

問答式經典。解釋佛教用語：三寶、九物。

殘卷、 $42 \times 22$ 。部分手卷、下面邊沿破殘。20行、不全。紙色灰、紙質粗。楷書大字。無題字。(九—十一世紀)

從「問三寶有幾種答有三種一體三…」、到「爲內地大外有血髓津潤安…」。(上、四四—三五頁)

とあるように、 $11 \times 10708$ は、首題がなく、最初の三寶の間答から、九物の内の内四大の解説の途中までを存し、以下を破損で缺いた斷片である。しかもテキストの地脚に當たる部分が破損していて、一行あたりの字數さえも判らないが、田中氏の校訂本<sup>(45)</sup>との比較によつて、もともと一行におよそ一六乃至一七字で書寫されていたことが判明した。それと同時に、 $11 \times 10708$ は、S五五三二と同系統のテキストであることも明らかになった。

(一一) 『禪門經』序(擬) ( $11 \times 10605$ )

北宗禪の思想を背景に創作された偽經『禪門經』については、柳田聖山氏らによつて研究が進められてきたが、その本文と『慧光序』と呼ばれる序文のテキスト校訂が、S五五三二によつてなされている。<sup>(46)</sup>そのほかに、P四六四六、露九五、鳥二二の三種の存在が、知られているが、その内の北京本の二種は斷簡であるといふ。<sup>(47)</sup>

ところが、今回筆者が新たに發見した $11 \times 10605$ は、從來全く知られていない『禪門經』のものである。『敍錄』にも編目されていないため、その書誌的情報は皆無である。そこで公表された寫眞のみを頼りにして、簡単に紹介しておく。

縦が長く、横の細い長方形の紙にわずか五行の文字が書寫されている。しかも紙の右下が缺けていたため、最後の二行の文字のみが無傷である。その無傷の二行で比定すると、もとの状態では、一行に約一九字前後で書寫されていることが推定できる。しかしながら、元來この文獻がどれほどの長さのものなのかについては、目下知り得ない。

次に、 $11 \times 10605$ の内容を示しておく。

1 幽跋(?)、遂使迷眞之輩、即五陰【約八字缺損】

2 徒、悟塵勞而登正覺。教之興也。算(?) 在慈(?) □□□

3 佛說禪門經者、雖至理無名、必因名而悟□□□

4 離相、亦寄相以明眞。斯蓋十力誠言、故稱佛說五

5 陰空寂、名曰禪門。千聖同遵、故名經也。

第三行には、『佛說禪門經』が、第五行には、『禪門』と「經」がそれぞれ解説を加えて、記されていることからして、筆者は「慧光序」の存在を知りながらも、敢えて $\Gamma \times \text{六〇〇五}$ に「禪門經序」と擬題をつけた所以である。

(一一) 『般若心經智融注』(斷簡) ( $\Gamma \times \text{〇〇一四九}$ )

最初に『般若心經智融注』(以下、『智融注』)という敦煌禪宗文獻を學界に紹介されたのは、柳田聖山氏である。すなわち、氏の「江南智融禪師注・般若波羅蜜多心經」と題した論文<sup>48)</sup>の發表である。その中では、柳田氏が完本である $\text{P三一一一}$ と首缺の北京本の $\text{晝四六}$ を用いてテキストの校訂をされた。それ以降、岡部和雄、福井文雅の兩氏も研究をされている。<sup>49)</sup>その本文譯注には、田中良昭、程正の兩氏による「譯注『般若心經智融注』」があり、その著者である江南禪師智融についての論考には、拙論「『般若心經智融注』の著者について」<sup>51)</sup>がある。

今回俄藏敦煌文獻から新たに發見された $\Gamma \times \text{〇〇一四九}$ は、この『智融注』の斷簡である。『跋錄』の解題には、

殘卷、 $\text{三三} \times \text{一六}$ 。手卷上部、首尾缺。一紙。13行(有幾行是雙行注釋)。第14行有一個看不清的字。紙色灰。書行細。楷書。無題字。(七—九世紀)(下略)(上、一二四頁)

とある。この斷簡の内容は、最初にあるべき序文が缺けていて、『心經』の經題の解釋の途中から、『心經』の本文で見出しとなる「舍利子、色不異空、空不異」までのテキストの一部が含まれている。またその次行の最初に半分しか残っていない「空」という文字と、その次に「即」という字の残される右上の一角から比定すると、この行は、『心經』の本文である「空即是色」から始まることが判る。『心經』本文で示すと、以下のようになる。

13 舍利子、色不異空、空不異【色。色即是空、】

14 空即【是色…】

そうすると、『心經』本文、つまり見出しとなる文字の大きさと計算すると、本來このテキストの一行には、一五字程度で書寫されていることが判る。

一方、從來知られている北京本の董四六の本文も、一五字程度で書寫されていることが確認できる。しかもこの兩者は、いずれも細薄い罫線のある紙に書かれており、筆跡もよく似ている。また、紙の傷んでいる箇所もほぼ同じである。更に、兩者の内容を確認すると、 $11 \times 100 - 149$ は先で、約四行の缺損があつて、次に董四六が續くという形になる。このような状況を総合的に判断すれば、この兩者はもと同一寫本の別の部分であるということになるであらう。

(一三) 【圓明論】(斷簡) ( $11 \times 100 - 696$ )

從來知られている『圓明論』のテキストは、服六、P三五五九、P三六六四、S六一八四、石井光雄舊藏本の五種であつた。そのうちの石井舊藏本は、未だ所在不明につき、見るべきないままである。以上の五種のテキストについての先行研究などは、田中氏の『圓明論』の論文に詳しく述べられており、そこにゆずりたい。田中氏は論文脱稿の後、新たにオルデンブルク本に $11 - 138$ の存在を知り、これを附記として論文の最後に付け加えたのである。ここで紹介する $11 \times 100 - 480$ は、まさにこれに相當する。

まず、『敍録』の解題をみてみよう。

解釋佛教名詞：因、果。

殘卷、 $7.5 \times 27$ 。部分手卷、首尾缺、嚴重破殘。2紙。54行、每行25—27字。殘卷包含第3品全部內容及其題字、以及第四品首。紙色灰。楷書小字。品題字爲「辨明修釋因果品第三、辨明三乘逆順觀品第四」。(九—十一世



紀)

從「:」[亦非]□「界非非」世「界」作此觀時、到「:」[種]善根惠」。(上、四四二頁)

解題に示されたように、Dx〇〇六九六は、『圓明論』の「要門方便品第二」の最後の一句、「亦非世界非非世界。

作此觀時」から、「辨明修釋因果品第三」を経て、「辨明三乘逆順觀品第四」の途中の「種善根惠」までを存する斷簡である。斷簡とはいえ、この寫本の出現によって、從來John R. McRae校訂本<sup>(53)</sup>ではいくつか不明とされる箇所を埋めることを可能にしたのである。こうした意味で、今後よりよい『圓明論』のテキストの作成には、重要な役割を果たすことが期待できよう。

### 三、結 び

以上、俄藏敦煌文獻に含まれる禪宗關係の文獻一八種(結合できるものを一種として計算)について、簡単ながら紹介してきた。前述したように、これらのすべては斷簡であり、それだけで從來の研究を大きく進展させるものではないが、「神會語錄」(擬)や「禪門經序」(擬)などのような從來まったく知られていない貴重なものもある。また、從來知られているテキストの校本としての價値の高いものもあり、今後さらなる活用が期待できるであろう。

また、本小論は、あくまで筆者個人の知りうる範圍で収集した俄藏の禪籍を紹介するものであり、決して俄藏敦煌文獻にある禪籍のすべてを網羅したものではない。今後より完全な目録を作成するためにも、各位のご教示をお願いする次第である。

(1) 『東方目録學』一九三四年第七期、八七―九二頁。

(2) 『東方目録學』一九三五年第八期、九六―一二五頁。

(3) 一九六三年、敦煌研究班は敦煌寫本研究班と改組され、ソ連科學アカデミアアジア民族研究所レニングラード分

所中國研究室の管轄下に置かれていた。

- (4) ソ連科學出版社東方文學部(舊稱、東方文學出版社)出版。

- (5) 實際にフルグ氏本人の手によって編目されたのは、三六八點のうちの三〇七點のみである。それ以降の番號は、メンシコフ氏などによって追加されたものという。Dxにいれず、あえてゆに追加するはつきりとした理由は不明ではあるが、筆者はおそらく敦煌寫本の紙幅の長さによつたのではないかと推測している。最終的には、『俄藏敦煌』が編輯される際に、新たに判つた『一切經音義』などの二點を含め、ゆの編目は計三六八點になった。

- (6) 『敍錄 上』(上海古籍出版社、一九九九年)、『俄文版第一冊序言』、一頁。

- (7) 『戒幢佛學』第二卷(戒幢佛學研究所、二〇〇二年)、五九三—六六〇頁。

- (8) 林世田、劉燕遠、申國美編『敦煌禪宗文獻集成 上』(中華全國圖書館文獻縮微複製中心、一九九八年)、四頁。

- (9) 田中良昭『敦煌禪宗文獻の研究』(大東出版社、一九八三年)、五四頁。

- (10) 田中良昭編『禪學研究入門』(大東出版社、一九九四年)四一—七一頁。

- (11) たとえば、五祖弘忍に歸せられる『修心要論』のテキストを紹介される際に、「レニングラードに斷片とみら

れるL二二七七、L二六四二の二本があるが、内容は知られていない。」とコメントされる。(田中良昭編前掲書、五八頁を参照。)

- (12) 『敍錄』の解題を引用した場合、その「上、\*頁」或いは「下、\*頁」でその上、下の二冊のどちらかの頁數のみを示す。

- (13) 田中良昭「敦煌禪宗資料分類目錄初稿 I 傳燈・嗣承論」「駒澤大學佛教學部研究紀要」第二七號(一九六九年)、五頁を参照。

- (14) 柳田聖山『初期の禪史I』(禪の語録2)(筑摩書房、一九七一年)。

- (15) 柳田本でいえば、『初期の禪史I』の五七頁から六八頁までの部分に相當する。

- (16) 『戒幢佛學』第二卷(戒幢佛學研究所、二〇〇二年)、六五五頁。

- (17) 柳田聖山『初期の禪史II』(禪の語録3)(筑摩書房、一九七六年)。

- (18) のちに、榮新江氏の發表原稿は、「有關敦煌本『歷代法寶記』的新資料——積翠軒文庫舊藏『略出本』校錄——」と題し、『戒幢佛學』第二卷(戒幢佛學研究所、二〇〇二年)に收載された。

- (19) 榮氏は、石井本の所在が未だ不明としながらも、入手した寫真による錄文を行い、更に他のテキストとの比較の結果、石井本が『歷代法寶記』の略出本であるとの結

論を出された。

- (20) 柳田本でいえば、五四頁から七七頁までに相當するものである。

- (21) 『周紹良先生欣開九秩慶壽文集』（中華書局、一九九七年）、一三二―一四四頁。

- (22) 郝春文編『英藏敦煌社會歷史文獻釋錄』第二卷（社會科學文獻出版社、二〇〇三年）。

- (23) このほかに、筆者は新たにS六一五九の一種を指摘する。また敦煌本以外にも、中國明代の隆慶四年（一五七〇）に朝鮮の安心寺で開版された安心寺本と、それに基づいて韓國の隆熙元年（一九〇六）に雲門寺で開版された『禪門撮要』卷上所收本の版本二種がある。

- (24) 田中良昭編前掲書、五七―五八頁。

- (25) 『駒澤大學禪研究所年報』第二號（一九九一年）、三四―四九頁。

- (26) 『敍録』には、 $\Delta x$ 一九九六、 $\Delta x$ 二〇〇六とある。

- (27) 田中良昭「敦煌禪宗資料分類目錄初稿 II 禪法・修道論（I）」『駒澤大學佛教學部研究紀要』第三號（一九七四年）、一五―一六頁を参照。

- (28) 筆者の確認したところ、二六行ではなく、三六行である。

- (29) 『敍録』によれば、その表に書寫されているのが、『金剛般若波羅蜜經』の經文であるという。

- (30) 田中本は、「相」を「想」に作る。

- (31) 田中本は、「道」を「導」に作る。

- (32) 『禪思想形成史の研究』（花園大學國際禪學研究所研究報告 第五冊）（一九九八年）、一九―四五頁。

- (33) 沖本氏が觸れられた先行研究以外に、冉雲華「敦煌文獻與僧稠的禪法」（『華岡佛學學報』第六期、七三―一〇三頁）の論文がある。また沖本氏の論文以降に發表されたものには、稻本泰生「小南海中窟と滅罪の思想——僧稠周邊における實踐行と『涅槃經』『觀無量壽經』の解釋を中心に」（『鹿園雜誌』奈良國立博物館、二〇〇二年、一―四四頁）がある。

- (34) 田中良昭氏によれば、P三五五九には『圓明論一卷』、『阿摩羅識論』（擬）、『導凡趣聖悟解脫宗修心要論』、『秀和上傳』、『導凡趣聖心決』、『夜坐號一首』、『傳法寶紀並序』、『終南山歸寺大通道和上塔文』、『先德集於雙峰山塔各談玄理十二』、『稠禪師意』、『稠禪師藥方療有漏』、『大乘心行論』、『寂和上偈』、『姚和上金剛五禮』、『大般若關』の一六種が連寫されているという（田中良昭「敦煌禪宗資料分類目錄初稿 II 禪法・修道論（I）」『駒澤大學佛教學部研究紀要』第二九號、一九七一年、一四頁）。現在、『阿摩羅識論』（擬）の一種は、『圓明論』の一部と見られ、また『終南山歸寺大通道和上塔文』の一種は、『傳法寶紀』の尾部に附されたものとみるのが一般的であるからして、筆者は連寫された文獻の数を一四

種とした。

(35) 田中良昭前掲論文、一四頁。

(36) 柳田聖山「傳法實紀とその作者——ペリオ第三五五九號文書をめぐる北宗禪研究資料の札記、その二」(『禪佛教の研究』〈柳田聖山集 第一卷〉法藏館、一九九九年)、一九二頁。篠原壽雄「北宗禪と南宗禪」(篠原壽雄、田中良昭編『敦煌佛典と禪』〈講座敦煌 8〉大東出版社、一九八〇年)、一七六頁。

(37) 田中良昭前掲論文、一四頁。

(38) 川崎ミチコ「修道偈Ⅱ——定格聯章——」(篠原壽雄、田中良昭編前掲書、二七〇頁。論文の最後には、従来の主な研究成果が列記されており、大變便利である。

(39) 川崎ミチコ前掲論文、二七六頁。

(40) 「行路難」のテキスト校訂には、關口眞大本(同氏『達摩大師の研究』春秋社、一九六九年)と『西域文化研究 第一』(西域文化研究會編、法藏館、一九五八年)に收録される校訂本がある。兩者のいずれもが龍谷大學所藏本を底本にしたものである。

(41) 田中良昭前掲書、三三三—三三四頁を参照。

(42) 楊曾文「神會和尚禪話錄」〈中國佛教典籍選刊〉中華書局、一九九六年。以下の引用はその頁數のみを示す。

(43) この問題については、最新の研究成果に、石井公成「華嚴宗の觀行文獻に見える禪宗批判——慧能の三科法門に留意して」(『松ヶ岡文庫研究年報』第一七號、財

團法人松ヶ岡文庫、二〇〇三年、四七—六二頁) などがあ

(44) 田中良昭前掲書、三六一頁以降を参照されたい。

(45) 田中良昭前掲書、三六八頁以降を参照されたい。

(46) 柳田聖山「禪門經について」(『禪佛教の研究』〈柳田聖山集 第一卷〉法藏館、一九九九年)、三〇一—三〇四頁。

(47) 岡部和雄「禪僧の注抄と疑偽經典」(篠原壽雄、田中良昭編前掲書)、三六六頁を参照。

(48) 「花信風」第二號、一九七六年、一三〇—一三四頁。後に、『禪佛教の研究』〈柳田聖山集 第一卷〉(法藏館、一九九九年)に再録される。

(49) 岡部和雄前掲論文。福井文雅「般若心經」注の敦煌新出寫本二點」(同氏『般若心經の總合的研究——歴史・社會・資料——』春秋社、二〇〇〇年)に再録されるが、その内容は、一九八六年に開催された「中國域外漢籍國際學術會議」で發表されたものである。

(50) 「松ヶ岡文庫研究年報」第一九號、財團法人松ヶ岡文庫、二〇〇五年刊行豫定。

(51) 「宗學研究」第四七號(曹洞宗總合研究センター)、二〇〇五年刊行豫定。

(52) 田中良昭前掲書、三八九—四〇〇頁。

(53) John R. McRae: *The Northern School And The Formation of Early Chan Buddhism*, University of Hawaii

